



中高生とともに差別と闘う

「ごまかすことをやめた」

吉成タダシ



進路が決まっていけない者の不安や悩みは、程度の違いこそあれ、みんな同じです。しかし、その「同じ」も「違い」も、出し合わねば見えてきません。ナイーヴな問題、プライバシーに関わる問題だからと蓋をし、避けていては、見えるはずのものも見えてこないのです。実際に語り合えないと見えてはこないのです。そして出し合えば、「あ、自分だけじゃなかった。アイツも同じだったんだ」と、不安な気持ちも少しは軽くなり、共に頑張り合おうとする存在へと変えることができるのだと思います。

ママやアオイやヨウヘイの言葉に、互いの間に空いているわずかな隙間を埋めるかのように、何人もが言葉をつないでいました。

やっぱり寂しい

「ボクは休み時間とか、結構壁やロッカーにもたれて教室とか見てたんですけど、だんだん空気が変わってきてるのが分かって。席着いて勉強してる人の数が増えたりとかして。けど、友達同士で話してる顔が、勉強してるのとは全然違って、何かすごい柔らかな顔になって。そういうのを見てるのがすごく好きで。高校に行けば初対面の子とかが多いから、そういうのが見られなくなるのかなと思って、やっぱり寂しいです」

教室の情景をいつもよく観ていたユウキ。そう言われてみて、多くの者が、漠然と視界に入れていた

何気ない当たり前の風景を、同様に、「寂しい」と心に描いたのではないかと思います。

誇りに思います

「もうすぐ卒業なんですけど、一年生とか二年生とか、三年生の初めの方は、こんなにみんなと本音の語り合いができるとは思っていませんでした。こうやって話していいなかで、同じ班になった子とか、席が近くになった子とかと仲良くなれて本当に良かったと思ってます。何より、このクラスで、こうやってみんなと一緒に語り合えたりしたことを誇りに思います。ありがとうございました」

誰が、というわけではありません。語り合う場にいたみんなのことを、「誇りに思います」と発したミナミ。そう言われたみんなの背筋が瞬間、ピンと伸びたように見えました。先生ではなく、同級生にそう言われることの意味は、とてつもなく大きいように思えました。

「ごまかすことをやめた」

人一倍感性が豊かだったユウキとミナミのやりとりには、忘れられない場面があります。

以前、「社会秩序と規律」というテーマで授業をしたことがありました。「ルールはなぜ守らなければならないのか」といった内容の授業でした。生徒からは、
・規律が乱れるから
・罪になり罰則があるから

・もめごとが起きるから
・信頼がなくなるから
といった答えが返ってきました。どれも正論であり、一般的にはそういう方向に流れていくだろうことは予測できていました。でもどれも他人の目を過剰に意識した、マイナスイ思考のようにも思えました。そこで、資料についてではなく、資料を通して、「今・ここ」のこと、自分のことを語り合おうと追ったところ、ユウキが思いついたように、自分のことを発言しはじめたのです。

「僕は少年野球のころピッチャーをしていました。ある試合で、コントロールが悪い自分にムカついて、デッドボールを何度も当てたことがあったんです。そんなことを何試合も続けていたうちに、デッドボールで押し出しという場面もあつたくらいでした。けど、いくらコントロールが悪いといっても、連続で当たれば不自然で、一生懸命に投げていけば、周りも、『頑張ってるな』と見てくれるけど、そのうちだんだん周りからの視線も冷たくなってきたように感じて。そんなとき、父が監督さんに、『デッドボールが多いので、ピッチャーをやめさせてくれ』と頼みにいったことがあったんです。よく見に来てくれている父親に申し訳ない気持ちになり、『やっぱり、フェアプレー精神じゃない。それに、一生懸命している相手に対しても失礼だ』と思うようになって、それから自分

を「ごまかすことをやめました。この授業で、そんな未熟だったころの自分を思い出せました」
この語りには、他者からの叱責も罰も出てきません。大上段に構えてクラスのみんなに正しさを押しつけているわけでもありません。抽象的で観念的な話に終始しているわけでもありません。自分の一番身近なところから起きた事実について、日ごろから思っていたことを、自分の言葉で伝えていきます。

決してスマートに、雄弁に述べたわけではありません。どちらかといえば訥々と、言葉を一つ一つ選び、考えながら、「自分語り」をしているのです。それは、私が求め描いていた姿のひとつでした。

人を変えるのは本当の思い

子どもに語れと言う前に、教師がどれだけ本当の思いを語っているか。どこから借りてきた言葉でなく、難しい言葉でも抽象的な言葉でもなく、自分の言葉で、自分のことを、具体的に、強さも弱さも、気高さも醜さも、自分のなかにある本当の思いを教師がどれだけ語っているか。そうした、「語り合う空間」に身を置いてきた子どもたちは、誰かを責めるのではなく、自分を卑下したり、見栄を張ったりするのでもなく、自然体であるがままの自分をさらけ出すことができるようになっていくのかもしれない。

(次回「まさかミナミが…」)